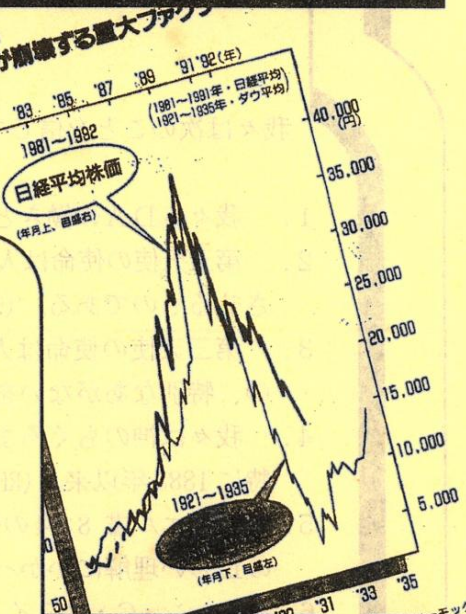
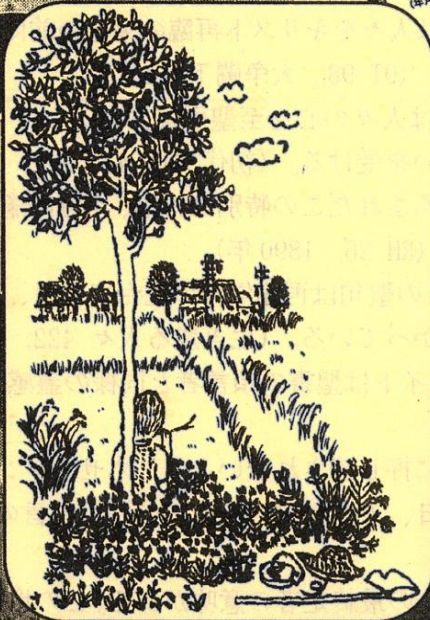


# Anchor

アンカー

連発する諸事件の意味

## 麻原教祖



第16号

## 目次

|            |    |
|------------|----|
| 連発する諸事件の意味 | 1  |
| ヨシュア記のポイント | 19 |
| 聖書に対する闘争   | 26 |

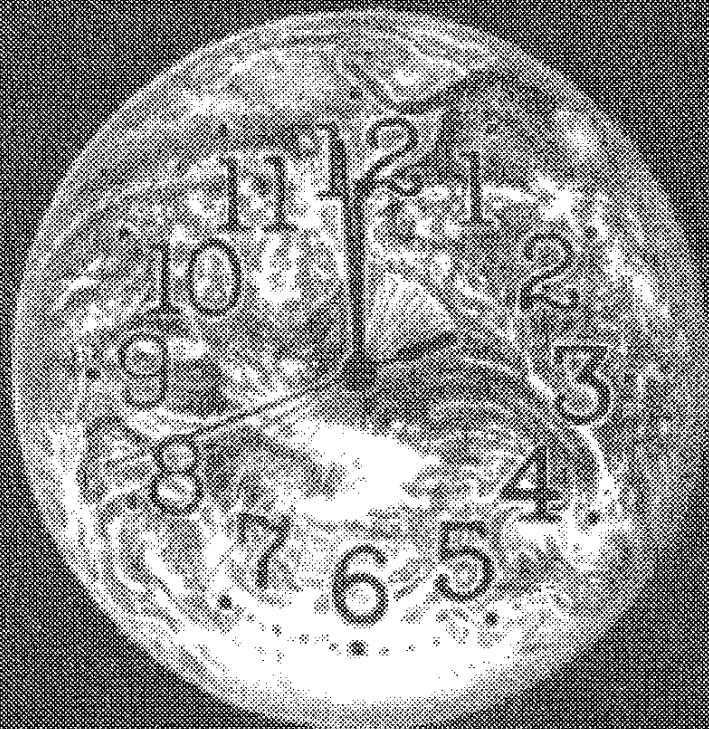
### アンカーの目的

我々は次のことを信じてアンカーを出版している。

1. 我々SDAの働きと使命は三天使の使命である。(6T 384, 2SM 142)
2. 第三天使の使命は人々をキリスト再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。(9T 98, 大争闘下 140)
3. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別なあがないを受ける。(初代文集 414, 5, 7)
4. 我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な経験を拒み続けてきた。特に1888年以来。(RH 26, 1890年)
5. ダニエル書 8:14の聖句は再臨信仰の土台であり、み業の完成はこの聖句の正しい理解にかかっている。(生き残る人々 422, EV 221, 5T 575)
6. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。(1SM 36)
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー(錨)は、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証(預言の霊)等である。(初代文集 417, 1T 300)
8. アンカーはリレーの最終走者の意味がある。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、150年も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。(大争闘下 182, 教育 328) 信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨とみ業完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとすれば、我々の今日の、義務は何か、約束のものを受ける条件は何なのかを研究し、共に備えたいと思う。
9. セブンスデー・アドベンチストは最後の「残りの民」である。たとい教会がどんなに背教しようとも、厳しい震いの経験をして、純潔な教会となり、永遠の神の目的がこの教会によって成就されると信じている。

# 連発する諸事件の意味

「残りの民」最後の教会に何を語るか？



# Just Before

今年に入って日本中を、いや世界中を震撼させた事件が矢継ぎ早に起こった。阪神大地震、オウム真理教—サリン事件—集団テロ事件、株安—円高と... 人々は一時恐怖と不安におそわれ真剣に考えもするが、「喉元過ぎれば暑さ忘れる」のが常である。神の民はそうであってはならない。神は、聖書を通し、自然を通して語っておられるが、諸事件を通しても語っておられるのである。文字や自然の声に耳を傾けようとしない現代人に、かなり強烈な手段で語っておられるのである。「そうしたすべてのことの中に、神の目的が読みとれるのである。それらは神が人間をその危機感に目覚めさせようとされる方法の一つである」(国と指導者上 244)。

## 阪神大震災

去った1月17日の阪神大震災、「未曾有の都市直下型地震」は5400人の死者を出し、街は一瞬にして瓦礫（がれき）の山と化した。それはあまりにも痛ましい惨事であった。全世界の驚きと同情を集め、連日各マスコミはその報道で埋まった。4カ月以上経っても未だにその深い傷は残り、多くの人々の不自由な生活が報道される。

地震国日本は、この経験を生かして、次の震災、緊急時にどう備えたらいいかというようなマスコミのプログラム、書物が多く出るようになった。われわれSDA信徒はこの経験から神が教えようとしておられる単なるサバイバル術以上の深い教訓と警告を学びとりたいものである。

地震の翌日空港で「週刊現代」の「巨大地震が首都圏&関西圏を襲う」という大見出しの記事に目が止まった。約10人の地震の権威者たちは関東直下型大地震を予告し、警告していた。国立八戸工業工専地理・地学専攻の堀田報誠教授、東大地震研究所の溝上恵教授、京都大学理学部・尾池和夫教授、建設省建築研究所国際地震工学部の石橋克彦応用地震学室長、日大教授で地震予知連会の茂木清夫会長、琉球大学の木村政昭助教授、都市防災の専門家である東京都立大学都市研究センターの望月利男教授、火山学専攻の東北学院大学の村山磐名誉教授、防災評論家の大山輝氏、立命館大学理工学部の見野和夫教授といった方々である。

その記事の後半に阪神大地震の可能性も....と言っていたのである。尾池教授は「西日本では、名古屋から京阪神にかけてが危ない。この地域は長期にわたって大規模地震が起こっていないため、かなりのストレスが地殻に溜まっています。私は21世紀の半ばまでには、このゾーンで確実に大規模地震が発生すると考えています。三陸はるか沖地震を“対岸の火事”と考えては決していけません。東北、北海道の地震が関西にまで波及することは、十分ありうるのです」と言っている。それがこの度は東京を飛んでまさかと思われた阪神大震災となって起こった。

見野教授も同じ事を言っている。

そしてその記事は東大地震研究所の溝上教授の次のような言葉を引用してこう結んでいた。

『首都圏を含め、大地震が迫っているにも関わらず、無関心な人が多い。自分の身は自分で守るしかないのにほとんどの人は無防備。たとえば、通勤途中に地震が起きたらどこへ避難すればいいとか、会社なら夜の飲み屋なら、と考えるおく準備が必要です』大地震の足音は、確実に近づいている」。

この雑誌の発刊日1月14日の3日後にあの大惨事！

テレビで、ある教授は「私は、50年前から言い続けてきたのに、だれも聞こうとしなかった」と悔しさと怒りの発言をしておられた。

この頃世界各地で、災害が次々と起こっている。暴風、たつまき、洪水、地震、火事、空、海、陸の事故は数ばかりでなく、だんだん大規模になってきている。今この記事を書いている時にまた、サハリンで地震が発生したとのニュースが入ってきた。

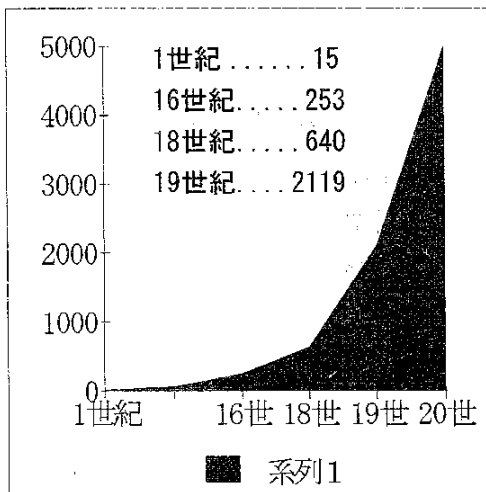
広瀬隆氏は日本に散在する50基の原発が大地震で揺すぶられたら、と警告する。

ちなみに、地震発生頻度を見てみよう。

## ——地震発生頻度——

British Association for the Advancement of Science (God speaks to modern man, A. E. Lickey p246 より)

破壊的な地震の数



20世紀 (Instruction manual for the new "pictorial aid" p78より)

|                  |       |                                |
|------------------|-------|--------------------------------|
| 1901~1944 (40年間) | M7以上  | 3                              |
| 1920             | 中国    | 死者-180,000                     |
| 1923             | 関東大地震 | 1,500,000被害者, その内200,000人以上の死者 |
| 1945~1954 (10年間) |       | 21                             |
| 1955~1965 (10年間) |       | 87                             |
| 1965~1974 (10年間) |       | 136                            |
| 1975~1984 (10年間) |       | 133                            |
| 1980 (1年間)       |       | 14                             |
| 1981             |       | 13                             |
| 1982             |       | 12                             |
| 1984             |       | 8                              |
| 1985 9-19        | メキシコ  | 死者7,000人                       |

そして今年、1995年1月17日、阪神大震災で死者5,400人以上を出す激震。

3907.  
5400人

地震は20世紀に入って激増し、しかも巨大化しているのである。聖書の預言によると、再臨前に世界的な超大地震が起これと言われている。地震の原因について100年以上も前にかかれた預言者E・G・ホワイトの興味深い記述を引用してみよう：

「このとき(ノアの洪水の時)、広大な森林が地下に埋没した。これは石炭になり、現在の鉱脈になり、また、多量の石油を産出している。石炭と石油はときおり地下で引火して燃える。こうして、岩石は熱し、石灰石は焼け、鉄鉱が溶ける。石灰石に水がかかると、しゃく熱度が高まり地震、爆発、噴火などの原因になる。火と水が、岩と鉱脈にふれると、大きな地下爆発が起こ

り、鈍い雷鳴のような音がする。空気は熱く、息苦しくなる。こうして噴火が起こる。熱せられたものが十分に発散されないでいると、地は、海の波のように振動して隆起し、大きなきれつを生じて時には都市、村落、火を噴く山々までのみこんでしまう」(人類のあけぼの上 109)。

## オウム真理教

オウム真理教—サリン事件は、この数カ月間、マスコミトップニュースの座についている。だれも考えたことのないノンフィクション・ミステリードラマのようにテレビに見入っている。3月20日の東京地下鉄無差別集団殺人事件は多くの人を恐怖に陥れた。その謎が今後どのように解明されるかは誰も興味を持つであろう。この宗教団体の背後に働く大きな力を読みとるべきだと思ふ人は多くはない。

オウム真理教について、鳥賀陽弘道氏は次のように言っている：

「簡単に言うと、オウムの教義は、『理論はチベット仏教、修業はヨーガ哲学』という折衷型だ。そもそも『オウム』とは、破壊的な男性原理を表す『A』と創造的な中性原理を表す『UM』を統合した、仏教・ヒンドウーを通じてもっとも神聖な言葉。仏教にも『おん』として頻繁に登場する。日本語では『阿吽<sup>あうん</sup>』である。麻原代表が仏教やインド哲学をかなり勉強していることでは、宗教専門家の見解は一致している。が、一方で、いろいろな宗教をつなぎ合わせているのもオウムの特徴だ。

わかりやすい例は、人類破滅のハルマゲドン(最終戦争)の危機を説くことだ。あきらかに、出所はキリスト教である。

『仏教にも、仏法が減じる法滅や末法という考えがある。が、世界もまた輪廻転生して盛衰を繰り返す、というのが仏教の教え。最終戦争が来る、というのは仏教の文脈からはでてこない』。東洋大学の金岡秀友名誉教授(インド哲学)はそう話す」(AERA 95/4/17)。

私は、現代の真理を託された最後の教会の一員としてオウム真理教の事件で様々な事を教えられた。いちいち書き連ねることはできないが紙面の許す限りかいつまんで後述してみよう。

## 経済崩壊、金融崩壊前兆 円高、株安による不安

3月になって円が80円を割り、株が16000円台になったことは、企業、金融、経済界にとっては、大きなショックとなった。アメリカ、日本のある経済評論家たちは、もう日本の経済

は立ち直らないとみており、60年前の経済大恐慌を繰り返すのではないかと警告している。

経済大恐慌というと、1930年にアメリカのニューヨークで始まった大恐慌を思い出される方もあるだろう。1920年代の繁栄ムードに酔いしれている時、10月24日ニューヨークの株が急落したのをきっかけにアメリカ経済が崩壊したのである。銀行倒産、企業倒産が相次ぎ、1933年度には4000行も倒産した。失業率が4人に1人。

そのような経済大恐慌が目前に迫っているというのである。「日本はいま、『恐慌前夜』の不気味な静けさ・・・それは台風の目にポッカリあいた不思議な晴れ間に似ている・・・のなかにいる」と浅井隆氏は警告している。彼ばかりではない。また、外国でも同じ様に警告を発している人に、ラビ・バトラ教授や、H. F. ギャー Jr 氏などがいる。今までそんなことは戯言のように聞いていた人が、今年に入って真剣に考えるようになったのではないか。ロケット工学博士・糸川秀夫氏も浅井隆氏の警告を軽視してはいけない、最悪の事態を考えておくべきだと言っている。

そのような経済大恐慌が目前に迫っているというのである。「日本はいま、『恐慌前夜』の不気味な静けさ・・・それは台風の目にポッカリあいた不思議な晴れ間に似ている・・・のなかにいる」と浅井隆氏は警告している。彼ばかりではない。また、外国でも同じ様に警告を発している人に、ラビ・バトラ教授や、H. F. ギャー Jr 氏などがいる。今までそんなことは戯言のように聞いていた人が、今年に入って真剣に考えるようになったのではないか。ロケット工学博士・糸川秀夫氏も浅井隆氏の警告を軽視してはいけない、最悪の事態を考えておくべきだと言っている。

東京発世界大恐慌になるか、ニューヨーク発世界大恐慌になるかはわからない。宇野正美氏は「大恐慌は世界支配のための手段であることを忘れないでいただきたい。世界の人々が危機に陥り、わらにもすがらる思いで世界政府を受け入れるという状況が作り出されるのである。その意味では60年前の大恐慌の時とは、目的が異なり、スケールも全く違う」と言っている。

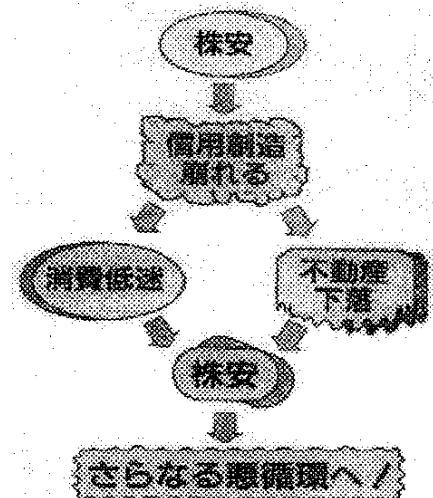
今日、経済問題を安定させようとG7、日米欧三極委員会、ウルガイ・ラウンド、日米構造協議会、WTO.... などといろいろな奮闘しているが、主の僕は次のように言っている：

「しかし、社会の現状の根底に横たわっているその原因を理解している人は教育家、政治家たちの中でも少ない。政府当局者も貧困、窮乏、犯罪増加の問題を解決することができない。彼らは経済機構をさらに完全な基礎の上におこうとして、むなしい努力を払っている」(ミニストリー 154)。

「永遠の光景の現実が人間に感じられるとき、まもなく金の価値が突然下落するであろう」(Evangelism 63)。

「今の1ドルが将来の10ドルよりももっと働きに価値がある」(9T 13)。

「我々がいかなる値段でも物を得ることのできない時代が来るであろう.... 今こそ働きを進めるときである」(5T 152)。



「お金をいつでも引き出せる銀行があると考えて、運営してはならない」(6T 209)。

我々は緊急時に備えて借金の習慣を造ってはならないことが警告されている。

預言の民は、このこともダニエル11章と黙示録17章、18章と照らして読まなければならない。

## これらの諸事件を我々はどのように読むべきだろうか？

自然の災害、テロ、暴動、贈賄... は頻繁に起こるばかりでなく、大規模になっていく。これらの出来事は我々に何を告げているのであろうか？ 神の民にとってどういうことを意味するのであろうか？

## 危機感に目覚める

### 預言者を通して語りかけておられる神の声に耳を傾けていただきたい：

「人間の香油ではいやすことのできない悲しみがこの世に起こるときが近づいている。神の御霊は取り去られつつある。地震やたつまきによって、また火事や洪水による破壊によって、多くの人命や財産が失われたことを何度聞かされることだろう。これらの災害は阻止することも抑制することもできない自然の力が気まぐれに突発するものであり、かつ人間の力では全く統制することのできないもののように見られている。しかし、そうしたすべてのことの中に、神の目的が読みとれるのである。それらは神が人間をその危機感に目覚めさせようとされる方法の一つである」(クリスチャンの奉仕 71)。

「全国各地の思慮深い、神をおそれる人がびっくりするような『罪惡の流行』の中に、わたしたちは生活している。このように流行している墮落は、とうてい筆舌に尽くし得ない。毎日、新しい政争、贈賄事件、詐欺行為が発覚する。また心を痛める暴動、不法、人間の苦痛に対する冷淡、さらに極悪、残忍な人命破壊の話聞く。また精神病、殺人、自殺も日々に増加していく」(同 72)。

「毎日の新聞は、近い将来における恐るべき争闘の兆候に満ちている。大胆な強盗行為がしばしば起こっている」(同 71)。

「われわれは時代の危機の入り口に立っていることを知らなければならない」(同 68)。



「混乱が地に満ち、大いなる恐怖がまもなく人類に臨もうとしていることを告げている。終わりは非常に近い。圧倒的な驚くべき事件がまもなく世に臨もうとしていることを告げている。我々はそのことに対して備えなければならぬ」(同 71)。

「神の抑制のみ霊は今世からとり去られつつある。暴風、嵐、火事、洪水、海陸の災害が次々と急速に起こっている。科学はこれらのすべてを説明しようと試みる。われわれの周囲に起こっているしるしは、神のみ子の来臨が近づいたことを告げているのであるが、それは真の原因よりも他のせいになされている。人々は、神のしもべたちが印されるまで風を吹かせないように四隅の風を引き留めている見張りの天使たちをみとめることができない。だが神の天使たちに風をゆるめるようにお命じなると、描写することのできないような争闘の光景が現われるしるしである」(同 70)。

「海陸の災害、社会の不安状態、戦争の警報などが危機をはらんでいる。それらは最大の規模をもった事件が近づいていることの予告である。悪天使たちは勢力を結集して、陣地を固めている。彼らは最後の大危機のために強化されつつある。まもなくこの世界に大変化が起ころうとしているが最後の運動は急速なものとなるであろう」(同 70)。

「こうした驚くべき現象は、キリストの再臨と世界の終末の直前には、もっと頻繁に激しくなり、滅亡がすみやかに近づいているしるしとなる」(人類のあけぼの上 109, 110)。

「サタンは、人々に対し、あらゆる病気をいやすことのできる偉大な医師のように見せかけながら、他方では病気や災害を生じさせ、ついには人口の多い都市が破滅して荒廃する。彼は今も活動している。海や陸における事故や災害、大火災、激しい突風、すさまじい降雹、嵐、洪水、たつまき、津波、地震など、あらゆる場所に幾多の形でサタンは力をふるっている。彼は取り入れまぎわの収穫を全滅させ、ききんと困窮を引き起こす。彼は空気を恐るべき病毒で汚染させ、幾千人もの人が悪疫で死ぬ。これらのできごとはますますひんぱんになり、悲惨なものになる。破滅は人間にも、動物にもおよぶ。『地は悲しみ、衰え、... 天も地とともにしおれはてる。地はその住む民の下に汚された。これは彼らが律法にそむき、定めを犯し、とこしえの契約を破ったからだ』(イザヤ 24:4, 5)」(各時代の争闘下 352)。

時には、災害は都市でなく田舎、郊外を襲っているのではないかと思われるときがある。しかし、災害が「ついには」確実に都会へとやってくるというのである。

ダニエルの預言した、地上かつて見たことのない「大いなる悩みの時」、ヨハネが言う7つの大災害、20世紀の預言者E・G・ホワイトが言う、フランス革命を起こした同じ教えが、全世

界を再び同様の争乱に巻きこむことが間近に迫っている（教育 269）。黙示録 13 章のセブンスデー・アドベンチスト弾圧も間近に迫っている。相次いで起こる災害は我々のせいだとされる。「法と秩序の敵で、社会の道徳的抑制を破り、無政府と墮落を引き起こし、神のさばきを地上に招く者である」といって攻撃される」時が迫っているしるしと読むことができる。（大争闘下 353, 357）。日曜休業令というほんとの問題を、指導者たちは隠しているのだと預言者は言う。しかし、確実にバチカンはその間に世界を誘導していることを我々は知らなければならない。世界支配陰謀ものが多く本屋に出回って混乱させられるだろうが、ローマ・カトリックの陰謀は確かである。（大争闘下 321）。そして覚えていよう。日曜休業令は、「神の民の永遠の運命を決定する、最後のテスト」であることを（7BC 976）。

## 時の切迫感の回復

これらの諸事件中に神の目的を読みとろう。まずは切迫する危機に目覚めさせる方法の一つであるという。神は時が短いを知っておられる。サタンも自分の時が短いを知って、激しい怒りをもって人類に臨んでいる（黙示録 12:12）神は愛をもって最後の訴えをしておられる。しかし、時が短いを知らないのは神の民であると言われている。「空のこのとりでもその時を知り、山ばとと、つばめと、つるはその来る時を守る。しかしわが民は主のおきて（さばき—欽定訳）を知らない」（エレミヤ書 8:07）。



国谷秀先生に導かれた、ある信徒の手紙に「この頃の我が教会の『サインズ』はどうしたのか？ まるで週刊誌みたいではないか？ 昔は『時兆』であった。時のしるしを顕著に表したものだ」と書いてあった。再臨運動の先駆者たちは、時の切迫感にみなぎっていた。こんなに時が延びるとはだれも思わなかったであろう。

預言者は、こんなにも時が延ばされているのは「神のみ旨ではなかった」と言う。それは神の憐れみの故に、教会の不信仰と不服従の故に延ばされているのだと言う。更に我が教会が神からの 1888 年の使命を拒んだ故であるとはっきり言っている。後の雨、大いなる叫びの力を拒んだのである。時が延びれば延びるほどラオデキヤ教会の目は「しるし」をみる視力が衰えて、時

の切迫感をも失ってきてはいないだろうか。心の中で「主人の帰りは遅い」と言うのは再臨信徒なのである。それが今日の「セブンスデー・アドベンチストの焦燥」を生み出したのではなからうか？

「キリストの再臨はこないとは言わない。しかし、どうしてそんなに再臨が待ちどおしいのか？ 50年後でも、100年後でもいいじゃないか？ どうしてそんなに天国、天国というのか？ 何が不足で天国にそんなに行きたがるのか？」と言われた信徒が嘆きの電話を私にしてきた。この世界の苦痛、悲慘を知っている人の言葉だろうか？ 世界の不公平、矛盾をしっているのだろうか？ 神がどんなにこの地球の苦痛を一つ一つ感じておられるか、イエスはそのためにもどれほど今も十字架の苦しみを続けておいでになるか、聖霊も被造物全体もどんなに共にうめき共に産みの苦しみを続けているかを知っているのだろうか？ こういう考え方はあまりにも利己的である。神はわたしたちの協力によって早くこの悲慘な光景を終わらせたいのである。「主よ、早く来たりませ」というのがアドベンチストの姿勢ではないだろうか？（教育 311, 312）。

時の切迫感を持つことが、働きへの動機付けを持たせる一因である。

「地上の住民のしたことが、神の裁きの座であらわにされる時がどれほど速やかに近づいているかを牧師たちが感じるなら、真理を提示するために、どれほど熱心に、神と共に働くであろうか！ どれほど熱心に真理を受け入れるように人々に働くよう努めるであろうか。世界に神のみ業を押し進めるためにどれほど不屈の精神をもって働くであろうか」（EV 17）。

時の切迫感を失うと、伝道も我々の生活も失敗する。

「我々は時の短さと、預言のとおり速やかに諸事件が起こっているという感覚をいつも持っているべきである。これらの真理が現実を受けとめられていないから、我々の生活は我々が告白する真理と矛盾するのである」（4T 612）。

「我々はどんな時代に住んでいるかを理解したいものである。我々はそのことをほとんど理解していない。そのことをほとんど考慮に入れない。わたしの心は、対決しようとしている敵のこと、またほとんど対決する備えができていないことを思うと、身震いする」（ISM 406）。

「イッサカルの子孫からはよく時勢に通じ、イスラエルのなすべきことをわきまえた人々が来た」（歴代志上 12:32）と書かれているが、我々も時代によく通じ、今日なすべきことをわきまえるとき、義務を果たすことができるのである。愛する花婿、主イエスの待ちこがれるそのお姿に思いを向け、そのお方の再臨を待望する者になりたいものである。

## 使命感

### 布告（メッセージ）

時が近づいている！  
君は、  
あの幽かなざわめきが聞こえるか。  
やがて来る嵐の予兆を感じているか。

まもなく世界は激変するだろう。  
すでに胎動は始まった。  
我々は急がねばならない。

君よ、思い出すのだ！  
何故、この時期この日本に  
自分が生まれてきたのかを！！  
遥かなる魂の約束を、  
自分の使命を思い出すのだ！

もはや時間はあまりない  
目覚めよ、真理の戦士たちよ。  
集え！真理の救済者たちよ！！

オウム真理教の刊行物に載っていた詩である。なんと迫力のあるメッセージではないか。強烈な時の切迫感を与えるではないか。「時兆」「サインズ・オブ・ザ・タイムズ」に目覚めよというのである。絶対的な価値観を失って漂流する、不安定な日本の青年たちに命をかけるに備える働き、使命があるのだと訴えている。真理のために戦え、人類救済のために立ち上がれとのアピールはあれほどの優秀な青年たちを捕えたのである。真の教会 SDA はお株を奪われた。

オウム真理教は真理を持っていなかった。真似ているのである。皮肉なことにオウムという鳥は物まねが上手である。彼らは特に最終時代の真理を真似て、世を騒がすことになった。終末思想、ハルマゲドンを曲解し、歪めて強烈に打ち出し、国家、社会を混乱に陥れた。信じきっていた教えが真理でないとき、使命が偽りであるとき、あのよう到大変な気違いじみた行為になって

しまうのだから恐ろしいことである。

しかし、使命が真理であり、正しいと知っていても、それに命をかけることができない場合、これまた惨めである。100%献身できなければ、知らなかった方がいい。ある方が次のように書いてきた。『世の終わり』を叫んで人を信仰に入れようとするような宗教には気がついた方がよいという人たちがでてきました。これからSDAも伝道しにくくなるのではないのでしょうか。これからは、世の終わりや再臨のことはあまり表に出さないで、キリストの恵みや愛だけを強調する教会にSDAも変わっていくのではないかと思います」と。そう思うのは、この方一人だけではないであろう。

以前はわが教会の機関誌は「使命」であった。使命があってアドベンチスト・ライフがある。使命が間違ったらアドベンチストのライフも行動も歪み、間違ったものになる。正しい使命が「ライフ」誌に載せられ、命をかけて正しい使命を世の人々に伝える100%献身したセブンスデー・アドベンチストになりたいと切に望むものである。

「ある人々は、つねに、天の真珠を求めているように見えるけれども、彼らは、自分達の悪習慣を全く放棄していない。彼らは、キリストが彼らの中に生きてくださるために自己に死ぬことをしない。彼らが高価な真珠を見出すことが出来ないのはそのためである。彼らは、まだ、汚れた野心や世の快樂を愛する心に勝利していない。彼らは、キリストにならって十字架をとって、克己と犠牲の道を歩かない。9分通りクリスチャンではあるが、完全なクリスチャンになっていない。天国に近いようではあるが、天国に入ることは出来ない。完全ではなくて、9分通り救われていることは、9分通り失われていることではなくて、完全に失われていることである」(キリストの実物教訓 95)。

## 洗脳の恐ろしさ

今回のオウム真理教や一昨年のテキサス・ウエイコーの事件によって洗脳の恐ろしさをつくづく思い知らされた。いろいろな手段があるが、そんなに過激な手段でなくとも、どの団体に属していても、絶えず我々はその危険にさらされている。我々、残りの教会とて例外ではない。昔のセブンスデー・アドベンチスト・ユダヤ人は“Intellectual Philosophy” = 「知的哲学」によって洗脳され、ついにメシヤを十字架につけてしまった。

「サタンはいつも、神の代わりに人間に注意を向けさせようと努力している。彼は、人々が自分で聖書を探って自分の義務を学ばないで、監督や牧師や神学者を案内者とするように導く。そうするとき、サタンはこれらの指導者たちの心を支配することによって、大衆を意のままに感化することができる」(各時代の争闘下 361)。

「いつも」サタンはそうするならば、「油断することなくあなたの心を守れ」（箴言 4:23）という警告に耳を傾けなければならない。神のみ言葉によって心を守っている者のみがマインド・コントロール、洗脳から安全に守られると言われている。「学問的」「科学的」ということで大衆はいつも簡単に洗脳されてしまう。全世界のほとんどの人が進化論の「学問的」「科学的」な理論で洗脳されてしまっている。

「聖書の真理によって心を堅固にした人たち以外には、だれも最後の争闘に耐え抜くことはできない。わたしは人に従うより神に従うべきかという鋭い質問が、一人一人に臨むであろう」（各時代の争闘下 359）。

オウム真理教のスポークスマンであった、上祐氏の弁明はあの若さで大したものであった。自分の信じることを、自分一人で弁明しなければならない時が我々にも近づいている。

## 全世界が小さなセブンスデー・アドベンチストに注目する時が来る

セブンスデー・アドベンチストが間もなく全世界の注目を浴びることが預言者によって言われている。

「今我々は、人目につかないかもしれないが、いつまでもそのままではない。矢面に立たせようと（人目につかせようと）する運動がなされている。歴史家や世の偉大な人たちによって我々の真理の教えが粉々にされ得るものなら、そうされるであろう」（伝道 69－英文）。

「これまで人類に与えられたことのない恐ろしい威嚇の言葉が、第三天使の使命の中に含まれている。あわれみを交えない神の怒りを引き起こすものは、恐ろしい罪に違いない。この重大なことについて、人々は、無知のままであってはならない。この罪に対する警告は、神の刑罰が下る前に世界に伝えられなければならない。それはすべての罰を受ける理由を知り、それを逃れる機会が与えられるためである。預言は、第一天使が『あらゆる国民、部族、国語、民族』に布告すると言っている。同じ三重の使命の一部である第三天使の使命の警告は、同じ範囲に及ぶのである。預言の中で、それは中空を飛ぶ天使によって大声で宣言されるものとして表されている。そして、それは世界の注目をひくのである」（各時代の争闘下 171, 172）。

「彼らは自分たちが多数であることや、富や、人気を指摘し、真理の擁護者に対しては、世からかけ離れた信仰を持つ少数、貧困、不人気な者として、軽蔑の目で見るのである」（各時代の争闘下 362）。

「しかもこの大欺瞞者サタンは、神に仕える者たちがこれらの災害を引き起こしているのだと、人々に説く。天の神の不興を引き起こしてきた人たちは、すべての災いを、神の戒めに服従することによって絶えず違反者たちへの譴責となっている人たちのせいにする」(各時代の 大争鬪下 353)。

「神は決して意志や良心を強制されない。しかし、他の方法で誘惑できない者を自分の自由に行しようとするサタンの常套手段は、残酷な強制である。サタンは、脅迫と強制によって良心を支配し、自分に服従させようとしてつとめる。それを実現するためには、宗教と政治の当局を通じて働き、神の律法に反抗して人間の法律を強制するよう働きかける。聖書の安息日をあがめる者は、法と秩序の敵であり、社会の道徳的抑制を破り、無政府と墮落とを引き起こし、神の裁きを地上に招く者であると**いって攻撃される**」(各時代の 大争鬪下 356)。

## 田舎に出よ

今度の阪神大地震も、地下鉄サリン事件も人々の密集する大都市で起こった。経済大恐慌が来るとすれば、困るのは大都会にすむ人々である。第二次世界大戦の時や、ソ連東欧共産諸国の崩壊の時もそうであった。

人は倒されたら、更に強固な建物をつくらうとする。しかしまた更に大きな災害が起こる。

「しばらくすればこれらの町々は、ひどく揺さぶられるであろう。たとえどんなに大きく、どんなに強固な建物でも、またいかなる火災にも対処できる防備が整えられていたとしても、.... 破壊されるであろう。.... 災害が今、巨大な建物や都市の大部分に降りかかろうとしている。それによって神は、全地球に何が起ころうとしているかを我々に示しておられる」(田舎の生活 3)。

「大きな町々が根こそぎにされる時は近い」(同 4)。

「労働組合の支配力が、大変圧力的になる時が急速に来つつある。我が民がその家族を町から連れ出して、自分達の作物を収穫することができる田舎へ行くように主は幾度も幾度も私に示された。それは、未来において売り買いの問題が大変なものとなるからである。我々は今、幾度も与えられた指令に注意を向けなければならない。町から出て、密集しておらず敵の障害から解放された田舎へ行きなさい」(同 7)。

「しかしもうしばらくすれば町に混乱と紛争が起こり、町を出たいと望むものたちが出られ

なくなる時が来る。我々は、これらの問題に備えなければならない」(同 8)。

『町を出なさい、町を出なさい』これが主からわたしに与えられたメッセージである」(同 34)。

「ローマ軍によるエルサレムの包囲が、ユダヤのクリスチャンたちにとって逃げ出す合図であったように、法王制の安息日を強制する法令に我が国(アメリカ)が権力を持つことは、私たちにとって警告となる。その時こそ、大都会から出る時です。それはまた小さな町を離れて、人里離れた山の中の引っ込んだ所に住まいを求める準備となる」(5T 464, 465)。

★ 順序がある。まず大都会から出て、比較的小さな町へ移る。恩恵期間が閉じるまでは大都会に働きかけなければならない。やがて恩恵期間が終わったら、人里離れた寂しいところに隠れ家を求めるのである。

## 都会伝道の方法

では都会伝道はどうすればいいのか?

「我々はアウトポスト・センターから都市に働きかけるべきであることを主は繰り返し指令なされた。これらの都市の中に神の記念碑として礼拝の家を持つべきであるが、印刷物の出版所や病人のいやし、働き人養生のための施設は都市の外に設立すべきである」(田舎の生活 33, 34)。

### 1978年世界総会年次総会の決議

「都会から田舎の生活へ」62, 63頁より

田舎の生活に関する次のような記録、文書を採用するよう決議する:

#### 1. 機関の開発、移転に関して

- ① 医療機関、出版所、事務所、大学、全寮制高校のために新築発展計画を考える場合、下記の勧告を考慮に入れること。
  - 1) このような機関は、人口の密集した市街地の郊外に所在すること、ただし、そのような地域に働きかけるのにほどよい距離にあること。
  - 2) このような機関は、働き人が次のような勧告に従えるような場所に位置すること。



「我々は都市に警告すると同時に、我々の子たちと我々自身をこのようなところに蔓延する汚染的な、墮落させる感化から守るような所に住むように賢い計画を立てねばならない」(Life Sketches 410)。

3) 新しい機関はできるだけ質素で経済的に計画すること。

- ② 環境が市街地化してしまつて再建築という問題に直面した大きな機関の理事は、このような機関の理想的な位置に関してE.G. ホワイトによって言われている勧告に注意を向けること。

## 2. 伝道戦略

- ① 大都市伝道計画の挑戦を優先にすること、そしてそれはE.G. ホワイトの靈感の勧告に調和して計画すること。

1) 「これらの都市はアウトポストから働きかけられねばならない。神のメッセンジャーは言った。『都市は警告されるべきではないか？確かにそうである。しかし、神の民が都市に住んでではなく、訪ねて行ってこの地上に起ころうとしていることを警告しなければならない』」(EV 77)。

2) 「ロトとその家族がソドムでしたことは、都会から離れた場所に住んでいてもできたはずである。エノクは神と共に歩んだ。彼はソドムでロトがしたように、あらゆる種類の暴動と悪徳によって汚された都市のど真ん中に住むようなことはしなかった」(EV 78)。

3) 「我が民は都市の郊外に位置すべきである。そしてこれらのアウトポストから都市に警告すべきである」(EV 76)。

## 3. 教会員に対する勧告

- ① 混雑した大都会を出てもっと田舎、小さい町に移るという勧告を学ぶように教会員に強く勧めること、その時に次の原則に留意すること。

1) 都会から田舎というのは必ずしも遠く離れた農村というのではなく、耕作できる土地のあるもう少し田舎、小さい町で、家族が霊的、肉体的に健全な生活をする助けとなる地域を意味する。

2) 田舎の生活は必ずしも農場を買うということだけでなく、小さなビジネス、実業を営める事も含んでいる。

3) 水の供給が充分で菜園ができるような良い土地が望ましい。

4) 都会から田舎に移る場合に、家族を支えるに十分な仕事、自営業を見つけておくこと。それは、失望とまた都市にUターンする結果をさけるためである。ある家族は大都市から

小さい町あるいは国、まだ伝道されていない地に移って自給伝道者として主のために記念碑を建てる働きを始めることができる。

- ② “From City to Country Living” 「都市から田舎の生活へ」というパンフレットを出版し、住宅を移そうと考えている教会員がこれを学ぶ機会を与えること。それと同時に E. G. ホワイトの「田舎の生活」というパンフレットも提供する。
- ③ 教会の指導者、預言の霊係、あるいは教団、教区によって指名された者はこれらの勧告に精通し、田舎に移ろうと考えている教会員にガイドを与えるようにすること。
- ④ これらの勧告は、祈り深く求めていくべき理想として教会員に掲げておきながら、一方新会員の中には経済的な理由でその勧告には直ぐに従うことは全く不可能であるという事情もふまえておくべきである。したがってこのような人々には、できるだけ田舎の生活のガイドラインと調和するように家族を世話し、訓練できるような他に採りうる方法を提案できるように努力する。

## 真理の弁明の備え

自分でセブンスデー・アドベンチストとしての信仰と立場を弁明できるように備えよう。セブンスデー・アドベンチストとしての立場にしっかりと立たせるのは何であろうか？

「聖所と調査審判に関する主題は神の民によってはっきりと理解されなければならない。すべてのものは、自分たちの大いなる大祭司キリストの立場と働きについて自分自身で知っている必要がある。そうしなければ、この時代にあって必要な信仰を働かせることも、神が彼らの為に計画しておられる立場を占めることもできなくなる」(各時代の大争闘下 222)。

「聖所問題が、1844年の失望の秘密を解く鍵であった。互いに関連し調和する真理の全体系を明らかにし、神のみ手が大再臨運動を導いてきたことを示し、そして、神の民の立場と働きをはっきりさせて、今なすべきことを明らかにした。... 今彼らは、至聖所の中に再び主を見た。... 聖所からの光が過去、現在、未来を照らした」(同 138)。

「嵐が迫ってくるとき、第三天使の使命を信じると公言していながら、真理に従うことによって清められていなかった多くの者が、その信仰(立場)を捨てて反対の側に加わる。彼らは、世俗と結合し、その精神を抱くことによって、ほとんど同じ見方で物事を見るようになっている。

そして、試練が来ると、彼らはすぐに、安易で一般受けのする側を選ぶのである。かつては真理を喜んだところの、才能ある雄弁な人々は、その力を用いて他の人々を欺き惑わす。彼らは、以前の兄弟たちにとって、最も苦い敵となる。安息日遵守者が法廷に呼び出されて、信仰について答えるときに、これらの背教者たちは、サタンの最も強力な手先となって、彼らの中傷し非難する。そして、偽りの報告やあてこすりによって、彼らに対する権力者たちの怒りをかき立てる」(同 378)。

## 備えせずば

- ① 「その時、彼らはわたしを呼ぶであろう。しかし、わたしは答えない。・・・」(箴言 1:28)。
- ② バビロンによるエルサレム崩壊が近づいていたのに、エレミヤの涙の警告に「彼らは主について偽り語って言った、『主は何事もなされない、災はわれわれに来ない、またつるぎや、ききんを見ることはない』と民は反応したのであった。(エレミヤ書 5:12)。 エレミヤ 5:12, 6:17, 8:10〜。

「これはエホバの神殿だ、神の都だ」と民は「致命的な安心感」に陥っていた。

- ③ 現代の霊的イスラエルは古代イスラエルの道をたどると預言者は警告している。

「わたしは、残りの民が、この地上に起ころうとしていることのために、準備をしていないのを見た。最後の使命を持っているという信仰を公言する人々の大部分は、昏睡状態のような無感覚に陥っている。わたしと一緒にいた天使は、非常な厳肅さをもって叫んだ。『準備せよ、準備せよ、準備せよ。神の恐ろしい怒りがまもなく臨もうとしている。... あなたがたは、準備の働きと、この最後の時代のために何よりも重要な真理を簡単にそらせてしまう。』」(初代文集 222)。

エレミヤの警告に耳を傾けた人はいたであろうか？エレミヤは、どれだけ涙を流して訴えたか。イエスさまのような愛と涙の警告を人々は鼻であしらった。その結果、どうなったであろうか？エルサレムは陥落。その城壁は崩され、神の名がおかれた聖所は倒された。民はバビロンの捕虜となった。

- ④ 今日、神は同じ様に警告しておられる。最後の民が、同じ様な悲惨な結果を経験しなければならぬということがあっていいだろうか？断じてあってはならない。

今日も、愛の訴えが聞こえてくるではないか？

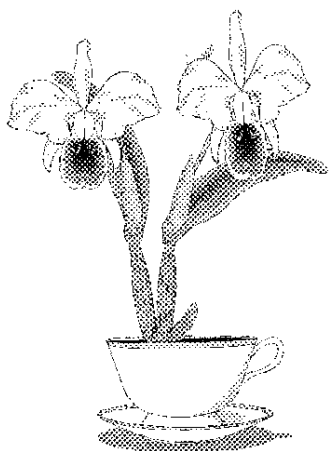
「わたしの声に聞き従いなさい。そうすれば、わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。わたしがあなたがたに命じるすべての道を歩んで、幸いを得なさい。」(エレミヤ書 7:23)。

完

## 無関心

4T 312

「明らかに時が延ばされたからといって、多くの者は彼らの危険に不注意になり**無関心**になる。それは神がその哀れみの故に彼らの恩恵期間を延ばし、未来の、永遠のために品性を築く時を与えられたことを理解しない」。



大争闘下 37

「まだ生まれてもいない後生の人々に与えられた啓示を、これら神の聖者たちが『たずね求め、かつ、つぶさに調べた』ことに注目しよう。彼らの熱心さと、後生の恵まれた人々がこの天の贈り物を扱う無気力な冷淡さとを、比較してみよう。これは、預言は理解できないものであると言って満足しているような、安楽を愛し、世俗を愛する**無関心**さに対しての、なんという譴責であろうか」。

大争闘下 260

「サタンの権力に抵抗しようとする努力もなく、教会と世の中に**無関心**がみなぎっていれば、サタンは、別に気にとめないのである」。

大争闘上 403 イエスの初臨の時

「天使が、イエスを迎える準備のある者は誰かを見るために地を訪れる。しかし、待ち受けている様子はどこにも見られない。メシヤ到来の時近づいたという賛美と勝利の声は聞こえない。天使は、しばらく、選ばれた都の上に、そして長い間神の臨在があらわされていた神殿の上にとどまる。しかし、ここにも同じ**無関心**さがある」。



# ヨシュア記のポイント

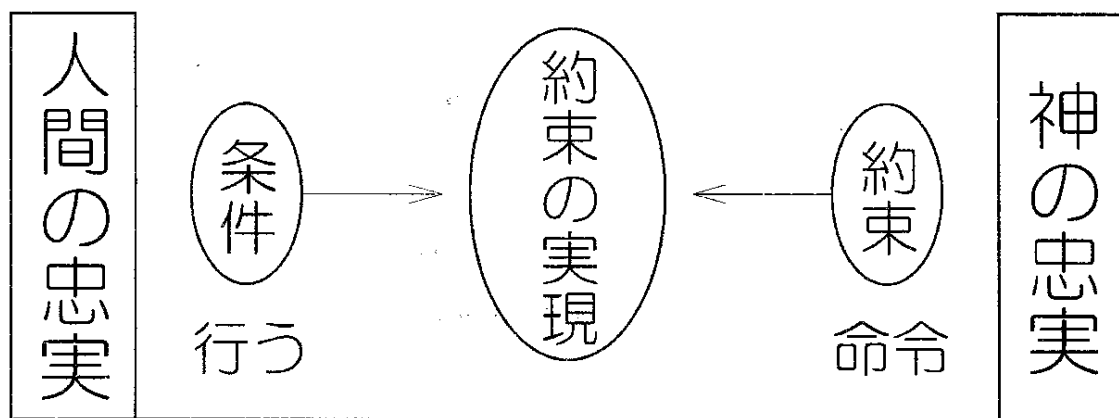
## ヨシュア記のメッセージ

今期の教課はヨシュア記の研究である。そのメッセージのポイントは、要約すると： 人間の忠実と神の忠実である。人間が神の言われたことを忠実に果たすと、神は約束されたことを忠実に果たされるということである。これがヨシュア記の二つの大黒柱である。

1. 一つは、ヨシュア記11:15の「主がそのしもべモーセに命じられたように、モーセはヨシュアに命じたが、ヨシュアはそのとおりにおこなった。すべて主がモーセに命じられたことで、ヨシュアが行わなかったことは一つもなかった」。

2. もう一つの大黒柱は、ヨシュア記21:45の「主がイスラエルの家に約束されたすべての良いことは、一つとしてたがわず、みな実現した」。

ヨシュア記23:14の「見よ、……あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束されたもろもろの良いことで、一つも欠けたものはなかった。みなあなたがたに臨んで、一つも欠けたものはなかった」。



神の約束の成就を見たければ、神のご命令と約束を明確に知ることである。「もし約束の実現がみられないとすれば、それは約束が理解されていないからである」(患難から栄光へ上 46)。今日の教会が神の約束の成就を見ていないとすれば、現代の教会に対する神の約束を明確に捕らえていないということになりはしないだろうか。

## 神の約束

### ヨシュアとイスラエルに対する神の約束は何であったか？

「主のしもべモーセが死んで後」 モーセとは、神の民イスラエルがエジプトを脱出するときに、神に用いられた偉大な預言者であった。「主はひとりの預言者によって、イスラエルをエジプトから導き出し、ひとりの預言者によってこれを守られた」（ホセア 12:13）。

そのように、現代のイスラエル、わが教会もバビロン（多くのキリスト諸教派）から導き出されるのに、神は、「ひとりの預言者」E・G・ホワイトを「主のしもべ」としてお立てになった。「主のしもべ」は預言者であった。二人とも預言者として召しを受けた。

近頃は、わが教会にE・G・ホワイトを預言者として呼びたくない人たちがいて、「預言者的指導者」とする人たちがいる。サタンは預言者の働きを、「預言の霊」＝「証の書」を軽視するように働いている。主のしもべ、E・G・ホワイトは、サタンは特に二つの、ユニークな柱をつき崩そうとすることを預言された。「イエスの証＝預言の霊」と「聖所の教理」である。これがわが教会における「サタンの最後の欺瞞である」。

モーセが約束の成就を見ないで死んでいったように、E・G・ホワイトも約束の成就を見ないで死だ。働きの完成はヨシュアに託されたように、再臨運動の働きの完成は我々に託されたのである。

### 「モーセに約束した」事(1:3)は何であったか？

それは、まず第一に、「乳と蜜の流れる地」をイスラエルに与えることであった。「約束の地」であった。第二に、「神が共にいる」すなわち、神の臨在ということであった。

### 現代のイスラエルに与えられた約束は、何であろうか？

神のみ業が終わって天のカナン、神の国に入ることである。この地上の字義的パレスチナではない。エルサレムではない。天のエルサレムである。その前に、神は、福音宣伝の完成のために、「後の雨」＝聖霊の満たしを約束しておられる。後の雨によって、信者の魂の内に恵みのみ業（品性）を完成し、我々の外に伝道を完成するという約束なのである。

主イエスが復活し、昇天して天の聖所に入られたのは、ご自分の民に聖霊を注いで、その力によって全世界に伝道を開始させるためであった。主が1844年に天の聖所から、至聖所に入られたのは、信者の内に聖霊によるみ業が完成して、福音宣教が完結されるためであった。主のみ業完成のご命令は、主ご自身の方法によってのみ完成させるのであるが、そのレッスンを学ぶのに我々は手間取っているのである。

後の雨=大いなる叫びによるみ業完成を、幾たびわが教会は求めてきたことだろう。約束を求めるのはよいことであるが、ヨシュア記は神が約束を果たされるには、我々はその条件を果たさなければならないことを教えている。わが教会の信心深い指導者たちの力強いリバイバル、後の雨を求めようとの訴えが鳴り響いた時が何回もあった。その記録が私のところにある。「われわれの間における真の敬けんのリバイバルこそ我々のすべての必要の中で最大にして最も緊急な必要である。これを追求することが我々の第一の働きである」(RH 1887/3/22)。しかし、神が我々にどんな約束をしておられるのかを認知することができなかった。ある指導者たちは、約束の後の雨が韓国で、中央アメリカで、北アメリカで降っているとまで発表し、世界中を回って民を奮い立たせようとした。現実には教会の背教がますます濃くなっていくにもかかわらず、こういう欺瞞に幾たびか教会員は欺かれてきた。神の約束の成就是なおも引き延ばされていることが現実であることを認めてヨシュア記の教訓をしっかり捕らえたいものである。

「モーセと共にいたように、あなたと共にいる」という神の臨在なしにアイを占領しようとしてイスラエルは失敗した。我々は預言者の勧告に従わないで、「人数獲得に汲々として」も神の前に成功したと言えるだろうか。機関が増え、人数が増えることで神はご自分の働きを評価なさらない。預言者はよくわが教会の機関誌で見られる「教会は繁栄している、進展している」という表現とは反対のことを言っている。

「民として我々の状態を考えると、わたしは悲しみに満たされる。主が天を我々に対して閉ざされたのではなくて、たえず背信する我々自身の行動が我々を神から隔てたのである.... 悲しむべき憐れな罪が我々の間に住みついている。それにもかかわらず教会は盛んである、教会の内部には平安と霊的繁栄があるというのが一般の見解である。教会は指導者なるキリストに従うことからまわれ右して、エジプトへ向かって着々と退却している。それなのに彼らの霊的力の欠乏に驚く人は少ない。神のみ霊のあかしに対する疑いと、はなはだしきは不信がいたるところ我が教会内に芽ばえつつある。サタンは教会をこのような状態にしておきたいのである」(クリスチャンの奉仕 49)。

神の臨在なしにあのプログラム、このプログラムを取り入れても完成しない。1888年に神は「ヨシュアとカレブ」を立てて、ご自分の方法でみ業を完成させようと言われた。しかし教会は拒みそれ以来深い背教に陥った。ヨシュア記で神が「共に」おられるという意味の言葉が約8回使われている。

## 条件=服従 「律法を守り行え」

神の約束には条件が付きものである。条件を果たさないで約束だけを主張することを憶測というのである。ユダヤ人の間違いはどこにあったか？ まず、神の約束を間違えた。聖書に明確に

栄光の王国の前に恵みの王国が来ること。栄光の前に屈辱を、十字架があることを読み落としてしまった。栄光の王メシヤの前に屈辱のイエスを、イザヤ53章のメシヤを受け入れなければならなかった。そして、メシヤ王国は悔い改めと、信仰、屈辱の経験によって実現されるはずであった。

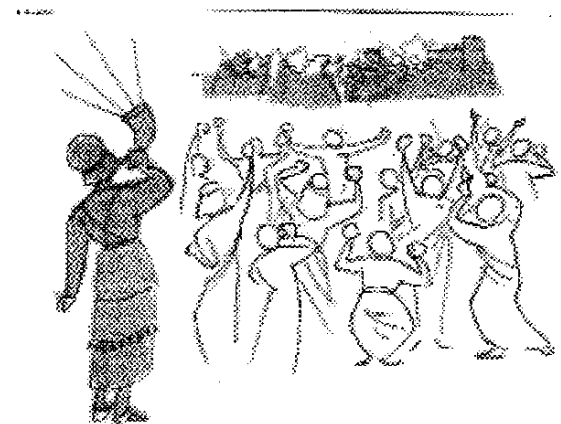
現代の霊的イスラエル（教会）も後の雨、み業完成、品性完成、約束の地に入ること……も悔い改めと信仰、最もつらい屈辱を通して与えられる経験である。約束だけを主張して「最後のあがないの日」の条件を果たさなければ、どんなに熱心に祈っても、「[サタンは、彼らに汚れた力を吹き込むのであった]」（初代文集 126）。

聖霊は従う者に与えられるのである（使徒行伝 5:32）。服従は約束の成就の条件である。ヨシュア記に、「主がモーセに命じられたように」という表現が約37回ある。「守り行い」という表現が約11回ある。「主がモーセに命じられたように」とくどいほど、くり返してわざわざ強調されていることは非常に大事なポイントだと思う。なぜ、主はヨシュアに直接命じたようにと表現していないのだろうか？ モーセこそ主と最も親しく交わり、主のみ告げを受けた預言者であった。イスラエルに対する約束と条件をくまなく与えておられた。

E・G・ホワイトも驚くべき預言者であった。世の終わりまで神の民に必要なあらゆる面のメッセージをすでに与えられていた。以後、神はそのような預言者をまた与えられるかについてはホワイト夫人もいっさい言及しておられない。ただご自分に与えられた証は世の終わりまで神の民を守る安全な勧告であるといっておられる。その勧告に従わないで、他のどこかにみ業完成の方法を見いだすのに汲々とするのは、ヨシュアの態度ではなかった。

ヨシュアは「すべて主がモーセに命じられたことで、ヨシュアが行わなかったことは一つもなかった」のである。だから、「主がイスラエルの家に約束されたすべての良いことは、一つとしてたがわず、みな実現した」。

「見よ、……あなたがたの神、主が、あなたがたについて約束されたもろもろの良いことで、一つも欠けたものはなかった。みなあなたがたに臨んで、一つも欠けたものはなかった」という神の約束が成就したのである。



## 神との協力

「強く、また雄々しくあれ」 この言葉は何を示唆しているだろうか？ わたしが共にいるから、勇気を出せ、がんばれと協力を求めているのである。



「主は我々の代わりに志すことや、実行することをもくろまれない。それは我々の働きである。我々が熱心にその働きにたずさわると否や、神の恵みは我々の中に志し、実行するように働きかける。しかし、それは、決して我々の努力の代わりとはならない。我々の魂は協力し目覚めさせなければならない。我々自らの救いを達成するために、聖霊は人間という器に働きかける。聖霊がしきりに我々に教えようとしている大教訓は、これである」(牧師への勧告 240)。

「克服するという大きな働きにおいて、人は何もすることができなという考えは誰も提示してはならない。なぜなら神は人の協力なくして何事もなさなからいからである」(ISM 381)。

我々が先天的、後天的な悪癖を克服する場合にも原則は同じである。我々の内に「働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現にいたらせるのは神である」が、意志し、行動し、実行するのは我々であり、我々の努力である(ピリピ 2:12, 13)。

「キリストの時代に人々の心にあった最大の欺瞞は、真理にただ同意することが義であるということだった」(各時代の希望中 16)。

今日、よく信仰による義と言うことを聞く。ヨシュア記は今日の信仰による義の盲点についているのではないだろうか？

## 律法を守る力、実行する力は神が与えたもう

ヨシュア記はそのことを明確に教えている。「主が共におられる故、おそれてはならない」と力を約束しておられるのである。これは信仰による義のチャンピオンであるパウロも教えている。「あなた方の内に働きかけて、その願いを起こさせ、かつ実現にいたらせるのは神である」と。だから「自分の救いのために努めなさい」努力しなさいと言っているのである。(ピリピ 2:13、12)。

「主がこの町をあなた方に賜った」「主はヨシュアと共におられ」「主がイスラエルのために戦われた」という表現が何回出てくるか調べて頂きたい。実に「主が敵をことごとく彼らの手に渡された」のである。我々の教会の共同体の働きにおいても、個人的な霊的な戦いにおいても、主が戦われるのである。しかし、我々も協力し、努力することがあるのである。

「それだから彼は、欠陥に打ち勝つことは不可能であるという致命的な詭弁をもって、キリストに従う人々を欺こうと、いつもけんめいになっている。.... だれでも、自分たちの欠陥は不治のものであると思ってはならない。神は、それらに打ち勝つ信仰と恵みをお与えになるのである」(各時代の争闘下 223)。

「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血を注がれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない」(同 140, 141)。

## 結果：栄え、勝利—その評価

「そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう」(ヨシュア記 1:10)。ただし、神の成功と繁栄と勝利の評価は、人間のそれとは異なることを覚えていなければならない。

「勝利のしるしを我々に与えるのは我々の人数でもなく、富でもない。それは、働きに対する献身であり、道徳的な勇気であり、魂に対する熱愛であり、うむことのない、揺らぐことのない熱心である」(3T 404)。

「成功は人数によらない。... 神は、神に仕えるものの数の大きさよりは、むしろ彼らの品性によって、栄誉をお受けになる」(人類のあけぼの下 97)。

「その外面の装いではなく、世とは全くかけ離れた誠実な敬けんさの故に、神は教会を重んじられるのである。神はその教会員が、キリストを知る知識にどの程度成長しているか、また、霊的な経験にどの程度進んでいるかによって教会を評価なさる」(キリストの実物教訓 277)。

### 今日の我々の必要は何であろうか？

神の約束を明確に知ることである。ご命令を明確に知ることである。条件を知ることである。その条件を自分の力では果たすことができない無力さを知って、神にはできないことはないということを知ることである。そして信じて、ヨシュアのごとく実行することである。

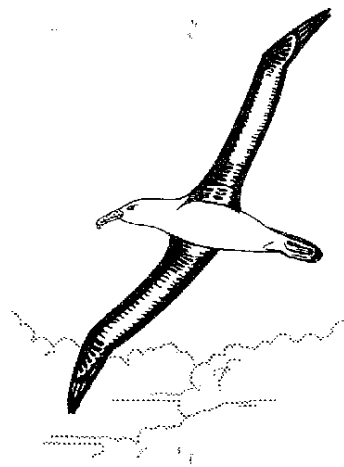
今日イエスは、天の至聖所におられる。天のカナンに入る前に我々のすべての罪に勝利しなければならない。先天的、後天的性癖に勝利することは不可能であるというサタンの詭弁を振り捨てなければならない(各時代の争闘下 223)。我々の最大の敵は「自我である」。緊急の約束は、完全に、永久に勝利する事である。完全な罪の除去である。後の雨である。完全な品性である。そして我々の外に福音宣伝は完成する。

主よ信じさせてください！約束を実現してください！「あなたご自身のために、これを延ばさないでください！」(ダニエル書 9:19)。「主が敵をあなたの手に渡す」というみ言葉に対する不信仰をゆるしてください！「我々が神のみ業を成す」「わたしが」「わたしが」「わたしが」を「砕いて、砕いて、砕いてください」。そうすれば、「主が」「すべてを」「成される」方だとしてみ名にのみ栄光が帰されるでしょう。

完

「過去半世紀の間に起こったりバイバルの多くには、将来大規模にあらわれるのと同じ勢力が、多少とも働いていた。そこには感情の興奮と真理と虚偽の混合が見られ、それは人を欺くのに好適なのである。しかし、誰も欺かれる必要はない。神の言葉に照らしてみるならば、これらの運動の本質を見定めることは難しいことではない。人々が聖書の証言をおろそかにし、克己と世俗の放棄とを要求する明解で人の心を試す真理から顔をそむけるならば、神の祝福を受けることができないのは確かである」。 大下 191

「聖書の明らかで率直な真理を受け入れたくない人達は、自分の良心を鎮静するのに都合の良い作り話を絶えず求めるようになる。霊的でなく、へりくだって自己を犠牲にする必要のないような教理であればあるだけ、ますます一般からの受けはよいのである」。 大下 267

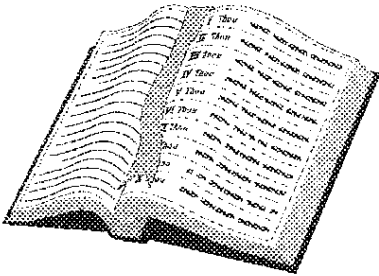


「それぞれの時代において、その時代に特に適切な現代の真理を伝えるために神に用いられる者は、全て、反対にあわなければならない。ルターの時代には、現代の真理、すなわち、その時代において特別重要な真理あった」。 大下 168

「真理の道は誤りの側に接近しておかれている。聖霊が働いていない者の心には一つのように思える。だから、真理と誤りの違いをすぐ見つけられないのである」。 1SM 202

「すべての説教は、やがて世界に下ろうとしている、恐ろしい審判という事を意識してなさるべきである.... どうか神が人々を目ざめさせて、永遠の世界の門口に立っている男女として生活し、活動するように助けてくださることを祈る」。 8T 37

# 聖書に対する闘争 (大争闘上 340)



世界は今、「ニュー・ワールド・オーダー」「新世界秩序」構築に向けて大変動、大変革しようとしている。「グローバリゼーション」「ボーダレス」という言葉が示すように、世界は境界線なく一つになろうという動きを表している。この発信地はバチカンであることを忘れてはならない。ドイツ東西の壁が崩れ、ソ連、東欧共産圏が崩壊し、ヨーロッパの諸国が境界線を取り除き、「散乱」から新しい秩序へとめまぐるしく世界は動いている。キリスト教界も大きく変わろうとしている。エキュメニカル（キリスト教再一致）運動は、新世界秩序への大きな推進力となるであろう。

そして聖書翻訳事業もそのうねりにのり、カトリックとプロテスタントは協力して新共同訳聖書を生み出したのである。これは大きな犠牲を払って築き上げたプロテスタント（抗議）主義の終焉を意味するものではないだろうか？ それは又、聖書に預言された最後の宗教改革、「大いなる叫び」（黙示録 18:1-6）の到来の間近いことを布告しているのである。

「聖書の世界」（自由国民社）より引用する：

「古くなった教会の制度や教義の殻を破って新しい時代の問題に取り組み、教会の革新を行おうとするときには、必ず新しい聖書翻訳の事業が計画される…。しかし、第二次世界大戦後の新しい聖書翻訳の運動はプロテスタント教会よりも、むしろカトリック教会の手によって推められた。この運動の最大の源は1962年から65年にかけて行われた第二ヴァチカン会議である」（聖書の世界 298）。

「このような変革の動機の一つとして、第二次大戦中のドイツなどにおいては、カトリック教会もプロテスタント教会も共にナチズムの支配の下に大きな苦難を経験したということがある。この、共に経験した苦難の上に立って今までの教会内の対立を捨て、協力して新しい時代の問題に新しい姿勢をもって取り組んでいこうというのが、第二バチカン会議の根本的な意図であったということができる」（同 299）。

何百年の隔ての壁を打ち破り、手を取り合っていくために深淵をこえてお互いに手を差しのべてきたのである。各時代の善と悪との大争闘の正念場を迎えたと言える。キリスト教の歴史は実に聖書に対する闘争であった。

新共同訳について、みなさんが研究される時、次の預言の霊の言葉を参考にして頂きたい。聖書翻訳についての書物を幾冊か読んでみたが、不思議なことにどれも証の書のようにワルド派のことについて言及していない。しかし、イエスの証＝預言の霊は彼らこそ、真理の継承者であり、保管者であることを述べている。それはマソラ本文、公認本文の聖書であった。

「アンカー」、「意見書」で、わたしはイエスと使徒達の使っていた聖書は「70人訳」聖書と書いたが誤りであった。それは聖書翻訳に関する日本語の資料にそう書いてあったためである。アレキサンダー大王が大祭司ヤドゥアに会ってから、ギリシャとユダヤ間に和ができ、それ以来多くのユダヤ人がエジプトのアレキサンドリヤに学問をしに行った。ここでヘレニズムの影響を受けてつくられた聖書が「70人訳聖書」であるという。

「ウルガタ訳は、必ずしも正確ではなく（現にローマ・カトリック側では、現在も、その改訂の作業中である）最初は必ずしも歓迎されなかった。しかし、だんだんとその価値を認められ、キリスト教の教理用語の多くはこの翻訳が採用されている。それゆえ、プロテスタントの教義学者熊野義孝も『70人訳とウルガタとを読むことは本格的な注解者の務めである』と述べている。

ローマ・カトリック教会では、対抗改革の時代に、この翻訳を、公認の聖書とすることに定めた。すなわち、トリエント公会議（1545～1563）の第4総会において、このことを決定した。この会議では、聖書と伝統を同列に並べたこと、ウルガタ訳を公認聖書としたこと、この聖書に旧約外典を含めていること、この3点でプロテスタントとの対立が明らかにされ、固定化された」（同 87）。

新共同訳が果たして「<sup>※1</sup>よりよい聖書」であるかを判断するため、幸いなことに我々には「預言の霊」が与えられている。「各時代の争闘」のことについて、次のように言われている：

1. 「最後の争闘において、サタンは同じ政策を用い、同じ精神を發揮して、過去のすべての時代と同じように、同じ目的のために働くのである。これまでにみられたことが、これからも見られるであろう。ただ異なるところは、来るべき争闘が、かつて世に見られなかったほどの恐ろしい激しさをもったものであるという事である。サタンの欺瞞はもっと巧妙になり、彼の攻撃はもっと断固たるものとなる.... これらを見言葉の光と聖霊の解明とによって見るときに、我々は悪魔の策略を見破ることができる.... 真理と誤謬との間の争闘の模様を解明すること、サタンの策略を明らかにすること.... 本書の目的である」（各時代の争闘上序 8-10）。

2. 「神と神の言葉に反対して働くサタンの方法は変わっていない。彼は16世紀におけると

※1 アドベンチスト・ライフ 1995、5月号

同様に、今もなお、生活の基準とされている聖書に反対している。」(同上 253, 254)。

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」(黙示録 12:17)。神の戒め、すなわち律法と、イエスのあかし—すなわち預言の霊、これで聖書は成り立っている。(イザヤ書 8:20、あるときには詩編も加える、ルカ 24:27, 44)。

3. サタンは聖書を嫌っているのである(各時代の<sup>大争闘</sup>下 327)。

サタンの敵意(同上序 8)は、①キリストに対して、②キリスト者に対して、③神の律法に対して(同上 63)向けられてきた。

だから、<sup>※2</sup>異教ローマを通し、法王教ローマを通し、<sup>※3</sup>無神論権力を通し、そして近代批評学を通して聖書に攻撃を加えてきた。

4. 「サタンの代表者」(同 44)、「悪魔の使者」(同 179) ローマの論法：

「サタンが人々の上に権力をふるい、横領者的な法王権をうちたてるには、彼らを聖書について無知にしておかねばならなかった。聖書は神を高め、有限な人間の真の立場を明らかにする。それゆえに、その聖なる真理を隠し、抑圧しなければならぬ。ローマ教会はこの論法をとった。数百年にわたって、聖書の配布が禁止された。人々は聖書を読むことも、それを家に持つことも、禁じられた。そして節操のない司祭たちや司教たちが、自分たちの主張を指示するためにその教えを解釈した」(同 46)。

5. 「わたしは、神が聖書を特別に守ってこられたことを示された。しかし、聖書の数が少なかった時に、学者たちがその言葉を変えたことがあった。彼らは、もっとわかりやすくしたつもりであった。」(初代文集 365)。

6. 「法王が長期間にわたって至上権を握っていた時、地上は暗黒におおわれたがしかし、その中であって、真理の光が全く消えてしまったわけではなかった。どの時代にも神の証人がいた」(大争闘上 59)。

7. 「幾世紀にもわたってワルド派のキリスト者達が信じ、教えてきた信仰は、ローマから出た偽りの教義と著しい対照をなしていた。彼らの宗教的信念は、キリスト教の真の体系である書かれた神の言葉にもとづいていた。彼らの宗教的信念は、キリスト教の真の体型である書かれた神の言葉に基づいていた。... 素朴な農民たちは、自分自身の力で、背信した教会

※2 デオクジャン帝の時徹底的に聖書を破壊しようとした。Which Bible 219. ※3 大争闘上15章

の教義や邪説に反対する真理に到達したのではなかった。彼らの信仰は、新たに受けた信仰ではなかった。彼らの宗教的信念は、彼らの先祖から受け継いだものであった。彼らは使徒時代の教会の信仰、すなわち「ひとたび伝えられた信仰」を強く主張した(ユダ3)。世界的な大都市に王座をかまえた高慢な法王制ではなくて、この「荒野の教会」がキリストの真の教会であり、世界に伝えるために神がご自分の民にゆだねられた真理の宝の保管者であった」(同 64)。

8. 「ワルド派の人々は、ヨーロッパにおいて最初に聖書の翻訳を手にした人々であった。宗教改革の数百年前から、彼らは、自国語で書かれた聖書の写本を持っていた。彼らは混ぜ物のない真理を持っており、そのために、特に憎しみと迫害とを受けたのであった。彼らはローマの教会は背教したバビロンであると宣言し、生命の危険をもちえりみず、その腐敗に抵抗するために立ち上がった。... そびえ立つ山々の陰に... ワルドは隠れ場を見いだした。そしてここで真理の光が中世の暗黒の直中であって燃え続けた。ここで千年以上もの間、真理の証人たちは昔ながらの信仰を保持したのであった」(同 65, 66)。
9. 「初代教会の信仰を保っているこの人々の存在そのものが、ローマの背教に対する絶えざるあかしであり、それゆえに、最も激しい憎悪と迫害を引き起こした。彼らが聖書の引き渡しを (surrender) 拒否したことも、ローマにとっては許せないことであった。」(同 79)。
10. 「古文書が、修道士たちの手によって偽造された。... そして真理を拒否した教会は、これらの欺瞞をすぐさま継承した」(同 52)。
11. 「ワルド派の人々は、ルターが生まれる幾世紀も前に神のために証を立てた。彼らは多くの国々に散らばって、宗教改革の種をまいた。宗教改革は、ウイックリフの時代に始まり、ルターの時代に広く成長した。そして、それは、『神の言葉とイエスの証との故に』喜んですべての苦難を忍ぶ人々とによって、世の終わりまで続けられるのである (黙示録 1:9)」(同 82)。
12. 「神は、神のみ言葉が全く滅び失せることをおゆるしにならなかった。聖書の真理は、永遠に隠しおかれるべきではなかった。神は、牢獄の扉を開き、鉄の門のかんぬきをはずして、神の僕たちを自由にすることができたのと同様に、生命の言葉を解放することも、たやすいことであった。... ワルド派の人々を除いては、神の言葉は長い間、知識階級だけが読める言語の中に閉じ込められていた。しかし、聖書が翻訳されて、各国の人々に、自国語で与えられるときが来た (ウイックリフの英語聖書翻訳)」(同 84-94)。
13. 「聖書の出現は、教会の権威者たちをうろたえさせた。今や、彼らは、ウイックリフより

も強力な力、彼らの武器も歯が立たない力と対決しなければならなかった」(同 95)。

14. 「ウィックリフの聖書は、多くの誤りを含むラテン語訳からの翻訳であった。それは印刷されず、写本の価格は非常に高価であったために、金持ちか貴族でなければ手に入れることができなかった (ヴルガタ聖書)」(同 309)。

15. 「1516年、すなわちルターの95箇条の論題が公にされる前年、エラスムスは、ギリシャ語とラテン語の新約聖書を出版した。神の言葉が原語で出版されたのは、これが初めてであった。この事業によって、以前の訳の多くの誤りが正され、意味も明瞭になった。... チンデルは、ウィックリフの事業を完成して同胞に聖書を与えるのであった。... 彼はエラスムスのギリシャ語新約聖書によって、福音を受け入れた。... 彼は答えた。『あなた方は我々に聖書を与えるどころか聖書を隠してきた。そしてあなたがたは、できることなら聖書そのものまで焼こうとしている』」(同 310)。

「ダラムの司教はチンデルの友人であった書籍販売人から彼の持っているだけの聖書を買取った。これは聖書を焼き捨てるためで、そうすれば、改革事業を大いに妨害することができると考えた。ところが...」(同 312, 316)。

16. 「何世紀もの間、真理と誤謬とは覇を競った。... 聖書に対する闘争は、ついに革命へと発展。(フランス革命)」(同 339, 340)。

17. 黙示録 11:2~11の1260年間の預言によると、二人の証人(旧約と新約聖書)は暗黒時代の間人里離れた「荒野」において、預言し、証し続けた。ローマはこの間、聖書を隠し、読むことを禁止してきたが、真理は「荒野の教会」よって守られ続けたのである。神の言葉を、人間はどのような方法によっても変更してはならないという警告がなされている。

1798年が近づくと、新たなサタンの権力、すなわち無神論権力が「神の言葉に公然と戦いを挑むことになった」(同 340-345, 350を読め)。

聖書を禁止 (同 354)。

それはローマ・カトリックがやったことに対する反動であった。(同 360)。

18. 「『荒野の集会』と呼ばれる、昔のキリスト教徒の弟子の子孫が18世紀のフランスにわずかながら残っており、南方の山中に隠れて、先祖の信仰をいぜんとして守っていた」(同 347)!

しかし、聖書は勝利する。1793年後3年半たって国会で許可。聖書協会がフランス、英国、米国で設立される。(同 366, 7)。

「聖書は多くの金づちをすりへらしたかなとこのようなものである」とある改革者は言っ



た(同 368)。

19. 「すべてあなたを攻めるために造られる武器は、その目的を達しない。すべてあなたに逆らい立って、争い訴える舌は、あなたに説き破られる」(イザヤ書 54:17)。

「われわれの神の言葉はとこしえに変わることはない」(同 40:8)。

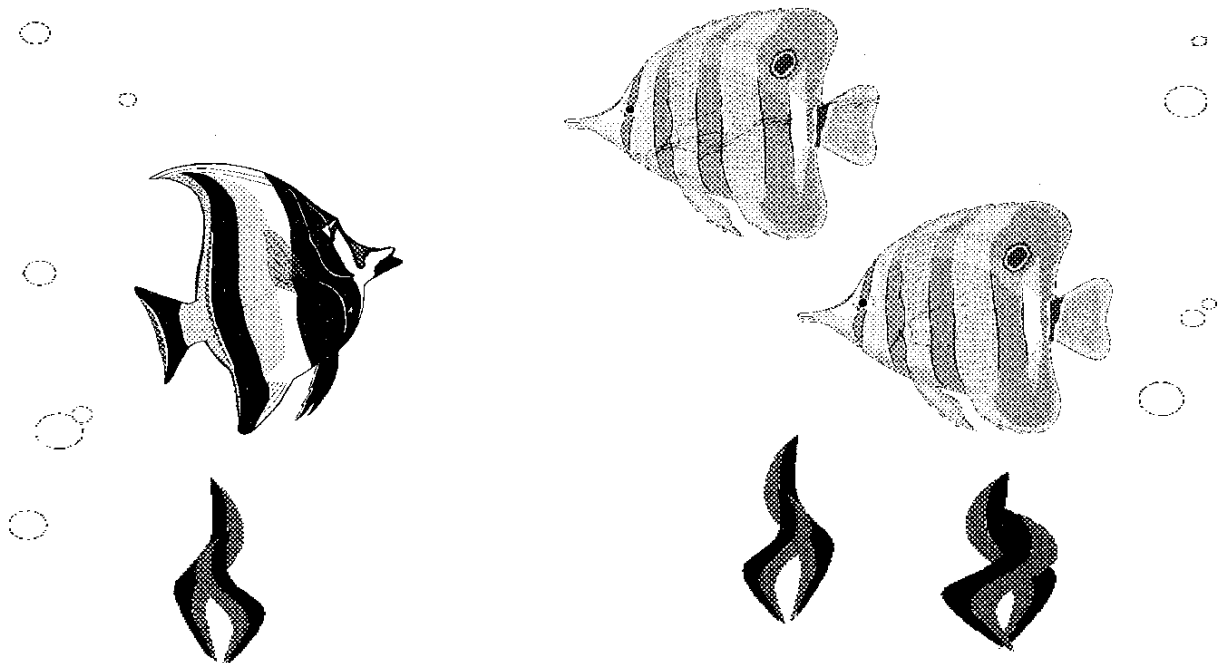
20. 「しかし、主はご自分の奇跡的なみ力によって現在の形にこの聖なる書物を保ってこられた」(ISM 15)。

「現在の形の聖書」とは、ホワイト夫人の使っておられた欽定訳聖書である。

「ひとたび伝えられた信仰」、継承された聖書、迫害され、憎まれ、「荒野の教会」によって保管されてきた聖書である。

まとめ：二つの教会、二つの聖書があることがわかる。

- 1) 真の教会と偽りの教会(バビロン)がある。
- 2) 迫害される教会と迫害する教会。
- 3) 混ぜ物のない聖書を持つ教会と腐敗した聖書を持つ教会。
- 4) 真理を継承する教会と聖書を偽造し、欺瞞を継承した教会。
- 5) 真理を保管する教会と真理を鎮圧する教会。  
があることがわかる。



# お知らせ

## 95年夏期研修会

カナダの自給伝道機関・フェアヘーブンのチャールス・スミスさんを招いています。彼は聖所の研究、最後のあがない」についてくわしい方です。今日、残されている恩恵期間はあとわずかです。さまざまな教理の風が吹きまわっています。再臨運動の土台が揺すぶられ、つき崩されようとしているとき、これほど重要な研究は他にあるでしょうか？ 聖所の研究こそ、セブンスデー・アドベンチストとしての立場を明らかにするものです。是非、この際、徹底的に研究しましょう。

時： 8月11、12、13  
場所： 八重岳学園  
電話： 0980-47-5537

詳しいことは追って連絡いたします。

※なお、赤城山学園では8月4、5、6日となっています。

赤城山学園の連絡先： 0272-83-6315

## テープについてのお知らせ

新しいテープ

・「主にある生と死」 金城重博  
「今より後、主にあつて」死ぬ人、生きる人の幸いとは？  
美しく死ぬ、美しく生きるアドベンチスト！

¥500円

- ・水野源三の詩に見る信仰のダイナミック
- ・逆境の効用
- ・信心の訓練
- ・生ける神の宮—エズラ・ネヘミヤの研究。
- ・新世界秩序への序曲
- ・A. 都会脱出 B. 今も主は導かれる

各500円

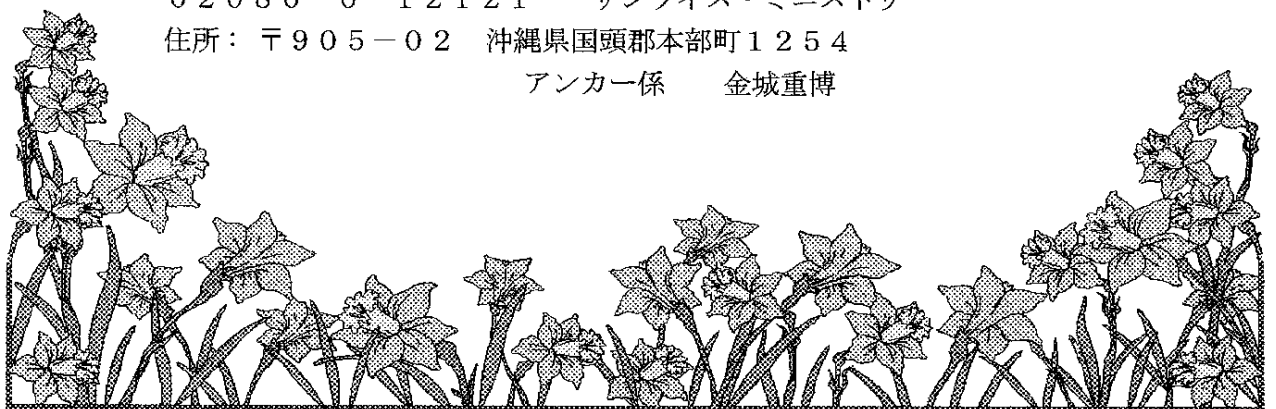


★ この印刷物は信徒の皆様の祈りと自由献金によって続けられています。  
1部350円ほどの献金をお願いできれば幸いです。なお、資料代や献金などの  
送金には郵便振り替えをご利用ください。振替口座番号は下記の通りです。

02080-0-12121 サンライズ・ミニストリー

住所：〒905-02 沖縄県国頭郡本部町1254

アンカー係 金城重博



*Anchor*  
アンカー

第16号

1995 Vol.8 No.2  
JUN 1

平成7年6月1日発行 第8巻第2号通巻16号  
アンカー出版部発行

